

上京

史蹟と文化



VOL. **5** 1993



美を創る

上京の史蹟⑥

上京区民ふれあいまつり

上京文化講座

思い出の西陣映画館③

春の区民茶会

上京クイズ「いれはむいよていふん」

美を創る

写真と文・中島孝雄

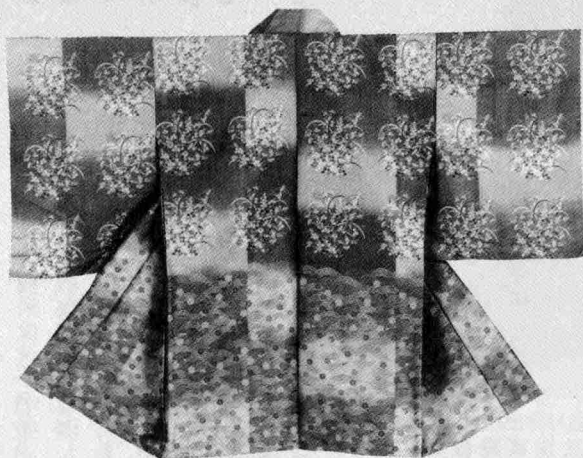
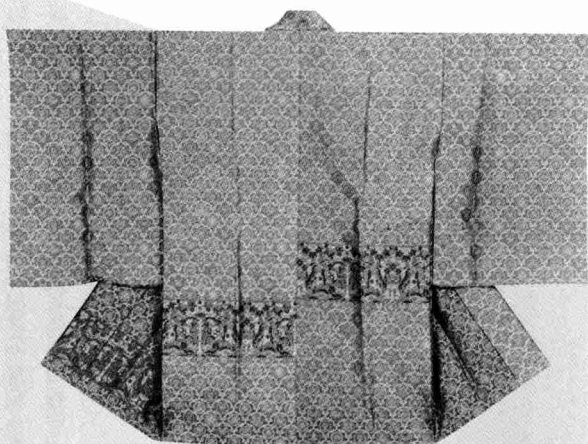
三上織物株式会社
京都市上京区千本通上長者町下る



千本通りを丸太町から北に進むと、上長者町の手前西側に巽蔵のある斬新な中に風格のあるたたずまいが見えてくる。それが三上織物株式会社の社屋である。

江戸時代より父祖代々に亘りこの地に住み、西陣高級着尺を中心に、伝統の火を絶やす事なく守ってこられた三上さん。

着尺織物の創業は明治初期。昭和二十九年に法人組織に改められ、以来、伝統的な織物技術を余すところなく駆使され、能衣装風な幽玄に満ちたコートなど、古き良き物を世に送ってこられた。しかし、一方、現代のニーズにあった四季を問わない薄物のレイン・ダスターコート（特許・商標登録）や、現代の若者が求める色使いを、イタリア、フランスなどからも取り入れ、和装産業としては常識からはみ出した楽しい色彩の染色工芸品も製造されている。



三上さんは語られた「私は、これからの新しい商品も、あくまで安心して身に纏っていただける、本筋のものを常に考えております」と。

現代社会が持つ種々な苦悩の中で、常に時代を先取りして前進を目指していかれる態度に、西陣機業の底の深さ、根強さを感じる。

上京の史蹟

その五

上京の歴史的推移

江戸時代（その二）

江戸期の豪商と文化人・光琳の生涯

江戸時代に入り、政治上の実権を江戸に奪われた京都は、やがて新しい商業・文化都市としての基盤を確固ならしむべく、経済的、文化的優位性を表面に押し出し、幕府に対抗するように

なります。しかし、幕府もまた、在京の大商人に対し、経済力の抑制策をとることによって、上層町衆たちの経済力拡大を規制したので、中世以来、上層町衆の系譜をひく人々の中には、衰退の憂き目を見る人達が現れました。

こうした経済基盤の混乱に乘じ、近在の近江や伊勢、また、遠く美濃方面から、在郷の町人たちが京都に流れ込み、次第に経済的な実権を握るようになります。しかも、その中の多くは上京に移住したのです。その理由は、

上京には西陣という彼等が活動するには格好の舞台があったからです。しかし、これら新興町衆たちは、ただ単に西陣のみには飽き足らず、大坂に進出することによって富の蓄積を計り、さらには、江戸にまで商業圏を拡大するようになります。

こうした結果、江戸中期頃の記録によりますと、上京には三十三人もの豪商の名前があげられています。しかも、その多くが呉服所や両替商などを営み、その所在地も、二条以北、中立売以南の堀川と室町の間という、禁裏、二条城、西陣機業に近接した地域に集住していることが注目されます。

呉服所とは、皇室、將軍家、御三家、諸大名等の呉服御用を勤める家を指しますが、その中には、例えば、禁裏呉服所の八文字屋善兵衛を筆頭に、本院呉服所は伊勢屋市左衛門などの名前があがっており、將軍家呉服所には、後藤家、茶屋家（四郎次郎）、三島屋、

上柳家、亀屋家、茶屋家（新四郎）などの著名な京呉服師が名前を連ねております。そのほかにも諸大名の呉服所は当時百六十六軒をかぞえ、そのほとんどが上京に集中していたのです。

また、両替商としては、筑前・黒田家と長州・松平家の蔵本として名高い三木権太夫、越後・榊原家の蔵本を勤める油小路下立売上るの日野屋甚太郎、長州・松平家の掛屋を勤める大黒屋善四郎（室町下立売下る）など、上京はまさに長者の町と言っても過言ではない景観を呈しておりました。

そのほか文化的な面からも、油小路今出川上るで刀剣の研ぎや目利きを営む本阿弥家や献上菓子司の川端家、一

条烏丸の虎屋・黒川家なども記されています。これらの記録が語るものは、彼ら豪商層が京都の町人文化を高揚さすうで大きな役割を果たしていたこともさることながら、上京がそれだけ文化的土壌として、根強い伝統を持っていたことを証明しているのではないのでしょうか。

このように文化的性格と商業的性格を兼ね備えて京都の町衆は、やがて、大名貸の失敗から栄枯盛衰を繰り返します。その一つの例が、近世絵画史上に名高い尾形光琳の生家・雁金屋でありましょう。

雁金屋は、かつて、中立売小川付近、または、中立売智恵光院付近に大きな



油小路通り今出川上ル
本阿弥光悦京屋敷跡



烏丸通り一条上ル とらや

店を構えていたと伝えられますが、今日正確な場所は未だに判明しておりません。光琳の先祖・伊春は將軍・足利義昭に仕える武士であったといわれ、二代目・道柏が若い時、近江・浅井長政の家来筋であった関係上、長政の三人娘である淀君、京極高次夫人、徳川秀忠夫人などに引き立てられ、その御用を勤める高級呉服商になったようです。この道柏の代は未だごく小さい商人であつたらしく、「殊の外貧しきものなり」などといわれていました。ところが、三代・宗柏の頃、幸運が巡ってきます。即ち、將軍秀忠の娘・和子が入内して後水尾天皇の女御になって

から、皇室との関係が結ばれ繁栄の道が開けます。

これによつて光琳、乾山の祖父・宗柏は、江戸の將軍家と東福門院和子を最大の顧客とし、雁金屋を發展さす一方、母方の叔父にあたる本阿弥光悦が開いた鷹峰の文化村に参加し、光悦をめぐる豊かな文化的知識と教養とを身につけ、茶を愛し、書画をよくする文人としてその頭角を現します。やがて万治三年（一六六〇）、家督は光琳の父・宗謙が継ぐことになります。宗謙もまた書を光悦の門人・小島宗真に学び、光悦流の書をよくし、絵画も狩野、土佐派の折衷体の絵を描く文化人

でありました。その上、能楽にも堪能であつたと伝えられます。そのため、当然彼の三人の息子たち、藤三郎、市之丞（光琳）、権平（乾山）も早くから能楽に親しみ、絵画も父から手解きを受けるという、恵まれた環境で育ちました。

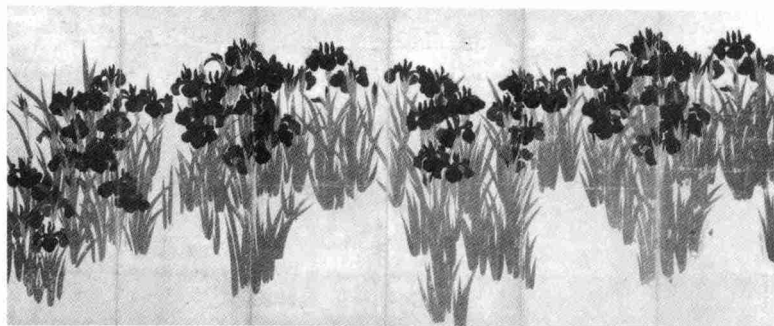
しかし、「好事魔多し」の諺が示す通り、光琳二十一歳の延宝六年（一六七八）六月、東福門院の死は雁金屋にとつて大きな打撃となり、最大の得意先を失つた雁金屋は、事業の縮小を余儀無くせざるを得なくなりました。このとき宗謙は、当時京都の裕福な町衆たちが行つていた大名貸に手を出します。そしてその結果、次第に回収不能となり、やがて没落の道を歩むことになります。

天和三年（一六八三）、事業の将来と自分の年齢とで気弱になった宗謙は、以前に放蕩の末、勘当していた長男の藤三郎を呼び戻し、雁金屋の家督を相続させ、その翌年、光琳、乾山の二人に財産の譲り状を書いていきます。それによると、長男・藤三郎には雁金屋の店を、次男・市之丞（光琳）には山里町家屋敷と西ノ京屋敷、三男・権平（乾山）には室町花立町家屋敷と本浄華院町家屋敷、鷹峰家屋敷を譲つてお

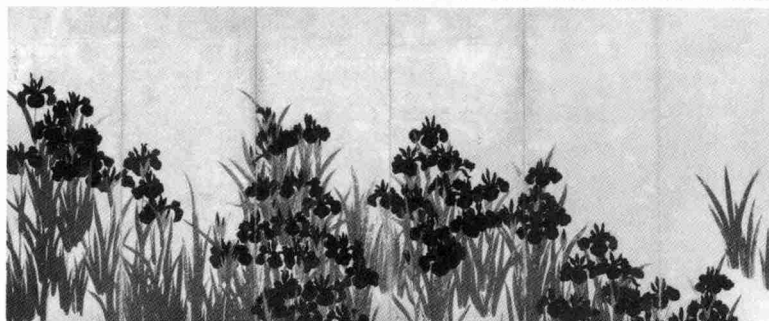
ります。特に、光琳が譲られた山里町の家屋敷は、かつて秀吉が築いた聚楽第の築山の跡で、多門町、高台院町へまで抜けるという広大な屋敷であつたに相違ありません。また、乾山が譲られた鷹峰の屋敷も、これまた間口二十間に及ぶ広大なものでありました。この事から考えても、雁金屋が当時としても店のほかに五ヶ所の屋敷を持つ大分限者であつたことを表しています。貞享四年（一六八七）六月、宗謙が六十七歳で世を去ると、当時三十歳になった光琳のもとに上記の家屋敷のほか、能道具一式、大名貸の証文、その他多額の遺産が転がり込みます。雁金屋から独立した光琳は、この頃から本格的な遊蕩生活を始めます。

光琳は、父・宗謙の薰陶を受け、生来趣味教養の広い人物であり、書画はもちろんのこと、和歌、茶道、能楽など遊芸百般に優れ、そのうえ、家業の呉服所で育つた関係上、意匠デザインにも秀でた感性を持ち合わせていました。そうしたことから、やがて京都でも当時名高い遊び人であつた二条綱平卿や銀座の役人・中村内蔵助との付き合いが激しくなります。

二条綱平卿との付き合いは、東福門院との関係で古くからありました。初



尾形光琳筆「燕子花図屏風」
根津美術館蔵



尾形光琳筆「紅白梅図屏風」 熱海美術館蔵

芸術的にも充実した光琳は、この新しい画室に籠り、彼晩年の大作を次々と制作したのである。有名な宗達筆になる「風神雷神図屏風」を模写したもののこの頃であり、やがて、彼最晩年の傑作ともいわれる、現在熱海美術館所蔵の「紅白梅図屏風」に到達するのである。この屏風は、絵画というよりもむしろ小袖などに見られる図案的感覚美をもっており、画面中央にまったく図案化された、いわゆる光琳波を流動的な曲線模様で描き、その右に紅梅が胸を張った格好で幹を伸ばし、左側には白梅がまず根元を見せ、それが一旦画面の外に姿を消し、やがて左上から枝を低く垂れて現れてきます。このきびきびとした感覚は、まさに光琳ならではのものではないでしょうか。宗達を学びつつも独自の厳しさで構成されたこれらの作品は、近世京都が生んだ世界にも誇るべき最高の芸術といっても決して過言ではないと思います。

享保元年（一七一六）六月二日、光琳はその波乱に満ちた生涯を閉じます。彼が、彼の芸術はその後も多くの人に引き継がれ、今日もなお、「琳派」の芸術として染織界はもちろんのこと、あらゆる分野において不滅のものとなっているのです。

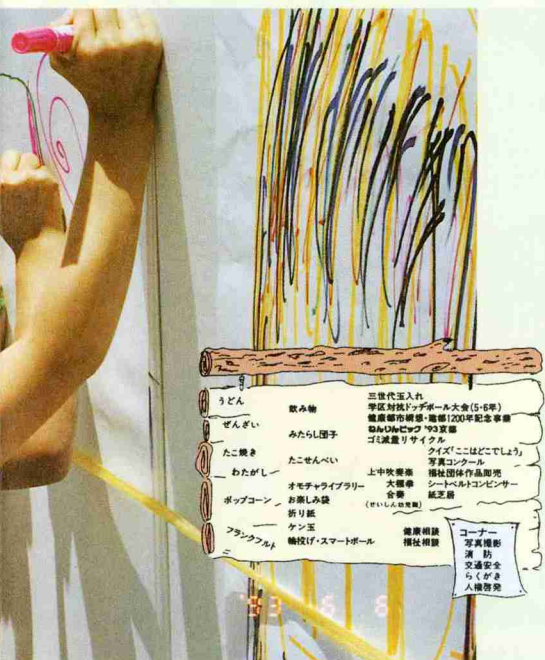
ふれあいまつり

ふれあいまつりも三回目、今年も上京中学校の校庭を会場として六月六日に行われました。好天の中、田辺朋之京都市長を迎え、日本全国に知られる上京中学校のブラスバンドや、せいしん幼稚園の鼓笛隊など上京区の誇る演奏が披露されました。

上京区民七千人を集めた会場には、上京社会福祉協議会をはじめ区内の各



N
e
w
s
k



夷川五色玉



豆 ま 政 ま
め

本店/〒604 京都市中京区夷川通堺町東
TEL.075(211)5211~3
三条店/〒604 京都市中京区三条通河原町東
TEL.075(255)0390

イタリアが好き!
イタリア料理専門店

レストラン

フクムラ

河原町店 中・六角河原町東入 255-5733(火・休)
四条店 中・富小路四条上ル 255-2060(水・休)
㈱イタシヨク(イタリアワイン・食品輸入元)(小売歓迎)
北・紫野大徳寺門前町 491-0900



上京区民ふれ

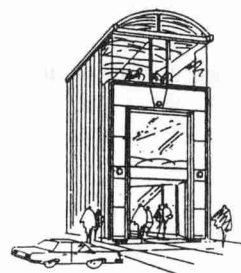
種団体が趣向を凝らした催しに区民の輪が広がりました。警察・消防・保健所・福祉事務所など日頃区民がお世話になっている機関からも、それぞれにイベントが上げられます。また三世代玉入れや学区対抗ドッジボール大会のようなスポーツにも興じ、模擬店も売り切れ続出、自転車の当たるお楽しみ抽せん会を最後に楽しかった一日を終わりました。



TOKIYA
SINCE 1926

くすり指に^{とわ}永久の祝福を

永久の愛を誓う輝き、ミキモトのブライダルジュエリー。
婚約指輪、結婚指輪、結納返しのメンズジュエリーなど多岐に取り揃え、
幸せなおふたりのご来店をお待ちしております。

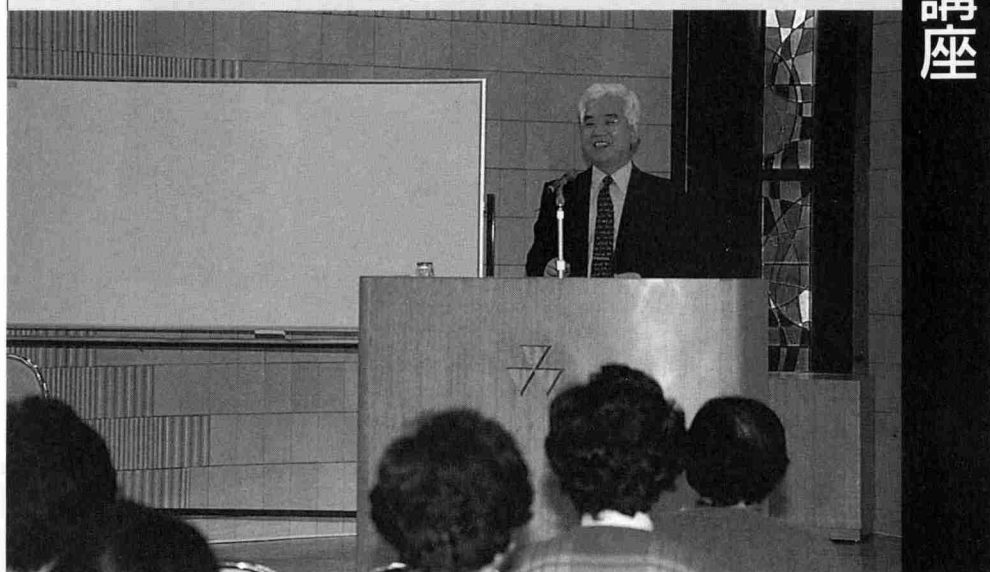


メガネ・宝飾・時計
トキヤ
地下鉄鞍馬口
TEL 075-432-4348

上京—1200年の足跡

講師 京都市歴史資料館

館長 山路興造氏



まずこの一条大路が平安京の人々にどのような意味があったかといえますと、京内と京外を境する道で、九条大路も、東西の京極大路と同じです。境を越えた向こうは未知の世界と考えられました。しかし、上京の町は北へ伸びて行きますから、一条大路に対する境という思いは薄れてますが、一条戻橋だけが、そのような思いを今に残しています。

上・下御霊社の祭

古くからの上京、二条大路より北の住民は上・下御霊社の氏子となっています。下京の住民は祇園御霊社の氏子として祇園祭を作りました。祇園御霊社はもとと平安京以前からの八坂氏の氏神に対し、上京の御霊社は出雲氏の氏神であったという同じような経緯をたどっています。

上御霊社は古くから現在の地に鎮座し、下御霊社の方は天正十八年（一五九〇）の秀吉の都市大改造によって今のところへ移され、それ以前は現在の府庁の前ところにあり、もともとは一条大路の北、京極大路の東、幸神社あたりが旧位置ではないかとされています。

上京の祭といわれる御霊社の祭は、

現在は出水を境にして北側が上御霊、二条までが下御霊の氏子圏です。上御霊社の神輿は旧暦の七月十八日のお出でに中御霊の御旅所に鎮座します。下御霊社の方は御旅所がなくて、お出での際に氏子圏を通って再び神社へお帰りになります。そして八月十八日に再び氏子圏を回ります。

祇園御霊社では山鉦が早く発達しました。それに対して、上京の御霊社では早くから鉦鉦けんげんが出ています。応永十二年（一四〇五）八月十八日の『山科教言卿記』には「御霊御興迎、北大路（今出川）を下に神幸、鉦三十余本、神興二社」となっており、応永年間からの伝承を持つ町々もあるようです。ただ御霊社の鉦も、下京の鉦も根元的には同じものだと私は考えています。

下京の住人も町が鉦を出すという上京と同じ形態の祭が行われていた以外に、將軍家が曲舞車くまいるくるまを出すことが南北朝の頃から行われます。これは下京の祇園祭とか稲荷祭には記録がありませんが、上京の方には記録がないのです。これは車のついた舞台で、曲舞を舞います。初めのうちは女曲舞おんなくまいでしたが、途中から稚兒曲舞となり、頭に天蓋をつけ、羯鼓かちうを打ちながら舞います。この囃子は能と同じ四拍子（笛、大鼓、

平安京は東西四・五キロ、南北五・二キロという計画都市で、道幅が二十丈で八十三メートル位の朱雀大路が中央に一本、二番目に広い二条大路は平

安宮の前を通りますから十七丈で五十メートル位、北辺の一条通が十丈で三十メートルというスケールの大きな道路ができていました。

小鼓、小太鼓)です。

今の祇園祭の山鉾の形態は鉾ではありません。舞台といった方がよいでしょう。たしかに上の方には長刀とかがついていますから鉾のようですが、下の方は鉾ではなく、台車なのです。実は祇園祭の鉾は南北朝に將軍家が出した舞車という移動舞台と、町の人が出した御霊祭の鉾がドッキングしたものだと思います。今日、お稚児さんが舞うのは稚児曲舞の残存なのです。

それに対して上京の住人はその曲舞車がないから、古い形態の鉾を出すことが今日まで残しているのです。山には鉾がついていません。単なる昇山(かきやま)です。山の上に能だとかさまざまな作り物をのせます。これも祇園祭の専売でなく御霊祭にも出していたのです。たとえば江戸時代の元和七年(一六二二)八月十八日に日野資勝というお公家さんが書いた日記に「清和院町、雪ころばかし山なり。山の内にて囃物あり。太鼓、鉦、祇園会と同じ。先前に鉦、鉦、笠にも雪付るなり。大鉦あまたあり、鉦六本。」と書いてあるのです。大きな綿の雪だるまを趣向とし、白帷子を着た人たちが曳きました。翌八年の八月十八日の条には「祭の渡し物これあり。去年より減少申候也。雪山囃

子、当年もこれあり。」となっていています。また五本の鉾のうち三本は立奉るが、二本は肩掛けてかついだとあって、だんだんに今日的な鉾だけの祭になって行ったようです。

信長の上京焼討ち

織田信長は永祿十一年(一五六八)の九月に足利義昭將軍を奉じて京都に入り、將軍の館を上京に造ります。その時の上京衆の状態は『耶蘇会士日本通信』に書かれています。これは宣教師たちが本国に送った手紙で、それを読みますと、上京のことを上の都、下京を下の都と呼び、「上の都は日本全国のお都にして、甚だ富たる人居住し、日本において用いられる絹物及び緞子は悉くここにて製造し、また主だたる人々の婦人にして最も高貴なるもの住みしが」と、当時の上京の状態がわかります。

翌十二年に室町勘解由小路に義昭の新しい屋敷を造営します。それと同時に、富栄えている上京の住民を見た信長は町衆から茶の湯の唐物・名物を徴発します。信長は上京の住民に対しては常に苛酷であり、敵意を持ち、反感を持っていました。相当に教養があり、上品で富栄えている上京に対しては、

あまりよくは思っていないのです。そこで、元龜四年(一五七三)に上京の焼討をやるわけです。その背景には義昭將軍と信長の間が不仲になり、上京も下京も全部焼いてしまおうと言っています。そのため、どちらの住民たちも懸命になって信長に貢ぎます。上京からも銀千三百枚を持って行きます。それを受け取りながら信長は上京だけを焼いてしまおうのです。焼かれた家が六〇七千軒、宮中の女官の手になる『お湯殿の上の日記』に「京中俄に大焼けにて、上京、内野になる」と書いています。

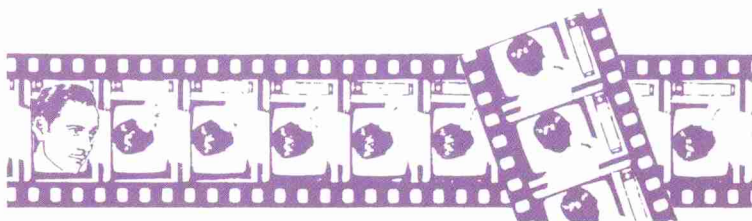
その背景について、『耶蘇会士日本通信』は「上の都の人は富且つ傲慢なる故に、条件をよくしてかえって信長の不快を招き、殊に建築に着手せる宮殿の周壁を破壊したることにより、その怒りに触れたり。(中略)上の都の人々は信長が彼らに回答を与えず、又献納したる銀千三百枚に少しも頓着せざるを見、彼等は傲慢なりしが故に心中これを憤りたり」と記しているのです。

焼かれたあとも上京の住民はすぐ復興いたします。焼討のあとも自治の力―長年ずっと痛めつけられていますから、少々なことでは大丈夫だという備えがあり、権力者に踏みつけられても、

元の町に戻して行くだけの智恵と力があつたのだと思います。

上京の住民たちは、お盆のあとに風流踊(ふうりゅうおど)をさかんにやっている記録があります。風流踊は盆踊りの原形ですが、これは踊り手たち一人一人が、新しく作られた歌詞や曲に合わせて趣向をこらした仮装で踊りまわるのです。当時はこれを風流踊といい、個人というよりも、一つの町、自治体、例えば一条室町踊、武者小路衆風流、立売町踊、六町衆踊など出てきますから、それぞれの町組ごとに集まって競ったようです。踊りの中心には造花などで趣向を凝らした大傘や燈籠が置かれ、そのまわりに女性の着物を着るなどした若い男たちが、揃いの笠や持ち物で、それぞれの特徴を出したのです。この風流踊りは、慶長九年の豊臣秀吉七回忌のうちに、豊国大明神の社前で大がかりに踊られますが、そのあとは徳川幕府の封建政策によって、さすがの上京町衆もエネルギーを削がれたらしく、大がかりなものは二度と踊られなくなりました。

三月八日に新島会館で行われた上京区文化振興会の文化講座の講演を要約しました。



思い出の西陣映画館

その三



丸太町田園劇場

(中京区油小路丸太町下ル)

終戦後、近くの富田氏の材木置場であった土地を当時河原町田園の河合氏により昭和三十一年十二月二十八日に東映「忠臣蔵」〔弥次喜多道中記〕を上映し開館、当時の入場料五十円、入場者数百五十名程でした。昭和三十六年頃田園東映と改称、その後もとの丸太町田園劇場となり、昭和四十二年六月閉館、現在ガレージ。

永楽館―常盤館

(上京区西堀川通上長者町西南角)

大正十五年頃寄席であったが、昭和の初期に改装して映画館となり常盤館と改めた。昭和二十年頃の強制疎開で閉館して市場になっていたが、現在十一階のマンション。

岩神座

(上京区上立売通浄福寺東入北側)

テレビ、ビデオ等の映像文化の勢いに押され、映画界の後退が叫ばれて久しい。西陣の発展と共に栄え、西陣の衰退と共にその灯を一つずつ消していった京都で、新京極について映画館、寄席の多かった西陣の興行街のうつりかわりに思いを馳せるのも一興かとも思われます。史跡にはありませんが、さしづめ史席と呼んだ方が良いのかも知れません。

上社と織物会社。

戦後西陣の映画少年



正親学区

松本雅年さん談

(55歳)

私の中学から高校時代というところ、昭和二十年代の後半ですが、そのころは近くの西陣京極の映画館で、洋画の二本立や三本立を学生料金で三十円か五十円で見たと覚えています。十円のおやつ代を貯めて週一回ぐらいは見っていました。それが焼けて今はない千中ミュージックだったと思います。

西陣キネマは洋画の二番館で、ゲリー・クーバーの「真昼の決闘」やエリザベス・テラーとかフランク・シナトラを見た覚えがあります。アメリカの戦時中の映画を十年ぐらい遅れて見ていたのでしょうか。そういえば、アノネオッサンも思い出しました。シミキンやエンタツ、アチャコなどの時代です。

西陣大映では「海賊キッド」が思い出されますが、やはり恋愛ものよりも活劇を見る方が多かったようです。若かった高倉健、天知茂、高島忠夫などが活躍していました。また、民話を主題にした名作もあって「笛吹童子」などが上映されていました。そのほか、市川右太衛門や片岡千恵蔵も懐かしいですね。

画面に雨が降る(傷が縦の白い線であらわれる)とフィルムが切れ、電気がついて一寸お待ちくださいということも、よくありました。夏は天井の扇風機だけで、冬は暖房もなく、おそろく満員の観客の熱気で暖まっていたのでしょうか。

松の家(芋徳の席) 八百屋

(上京区大宮通寺之内下ル東側)

明治の初めからあり、八百屋の二階で夕方からの寄席であったが、明治三十年頃に廃止、現在文具店、隣家の桜湯は現在も営業。

中筋の席

(上京区中筋通千本東入)

明治十六年頃にあり。中筋のこのあたりか、いつまであったか不明。北側は西陣郵便局となっている。

寿座

(上京区中立売通浄福寺西入上ル)

歌舞伎専門の劇場で、明治三十三年火事のため全焼、明治四十三年七月改築竣工して、片岡九蔵の「塩原太助」を上演していた。場所は千中ミュージックのあった所の北側にあったという。大正五年九月新京極三友俱樂部焼跡に移築された。

大宮座―大宮館

(上京区大宮通中立売上ル西側)

はじめ大宮座で、後大宮館と変わった。又たび亭ともいったそうで、明治の末から、大正五、六年ごろまであった。当時、中立売上るに二軒、下るに一軒と三軒の小屋があったという。

広沢館

(上京区千本通今出川上ル西側)

今も残る西陣の映画館

明治中ごろの開館で、井上菊松さんの所有であった。明治二十六年には浮れ館、その後、浪曲などいろいろの興行をしていたが、終戦以前に閉館して、餅菓子店から、現在ガソリンスタンド。紅梅亭―紅梅館

(上京区西堀川通丸太町上ル)

明治三十一年開設した席で、明治十

五年一月九日紅梅亭となり、大正五年十一に紅梅館に改称したが、昭和五、六年頃にはすでになかった。春日座―堀川中央館

(上京区東堀川通下長者町東北角)

明治四十一年十二月九日開設した席で、映画館になっていたが、強制疎開のためなくなり現在道路敷。



千本日活

シネ・フレンズ西陣(旧西陣大映)

菓匠  本家玉寿軒

〒602 京都市上京区今出川大宮東入
TEL (075) 441-0319
(075) 414-0319

三回にわたる本稿は、上京区にゆかりのある方々の西陣の映画館の懐古談に加えて、京を語る会・田中泰彦氏著「西陣の史跡 思い出の映画館」(三星社刊)から引用した文章でもって綴らせていただきました。

田中泰彦氏の御厚意に感謝いたしますとともに、あらためて同書をお読みいただければ、西陣の映画館のその後を、より詳しくたどっていただけるとと思います。

(三島利則)

春の区民茶会

今年も春の上京区民茶会が北野天満宮で、表千家の懸釜によって行われました。茶の湯を育んできた上京区の文化発展と地域振興を目的として、地元の人々にお茶を楽しんでいただくとうとして、毎年春秋に開かれております。今回は四百五十人の来客が本席「明月舎」と社務所書院の副席で一碗の茶を喫しました。

会記（本席・明月舎）

主 不審庵

寄付掛物 高安和尚一行 青松不老年

本席掛物 碌々斎筆 千秋万歳

花入 別府製籠 惺斎箱

香合 鎌倉笠 銀紅紙釜敷シキテ

釜 惺斎好刷毛目切合せ

風炉 同ツボツボ透し琉球 浄長作

即中斎好コマツナギ風炉先屏風

吉兵衛作

惺斎好好文棚

水指 黄セト 惺斎箱

茶器 即中斎好 神宮古材内霞溜大ナ

ツメ 宗哲作

茶碗 慶入作 光悦 青苔写

替 即中斎好 乾山写 松ノ絵

永楽造

茶杓 即中斎作 銘よろこび

建水 利休写 新サハリ 浄益作

蓋置 犬山 チキリ

☆秋の区民茶会は、十一月二十八日に裏千家研修会館で開かれます。☆

永年の信用と実績
真心のこもったご奉仕

葬祭センター 株式会社

公益社

本社

烏丸三条下ル ☎(075)221-4116(代)

北公益社／京都市北区紫明通堀川東入
中公益社／京都市東山区五条通東大路東入
南公益社／宇治市横島町(文教短大前)
滋賀公益社／大津市朝日が丘一丁目

☎075(431)7121(代)
☎075(551)0042(代)
☎0774(20)0042(代)
☎0775(23)0042(代)

上京クイズ

前回の正解は

京都府庁本館

京都府庁は京都市民にはあまり馴染がないのでしょうか。今回も正解者が定数に達しませんでした。釜座通の突き当たり、明治三十七年に建造された



本館正面のベジメントです。煉瓦造、二階建、ルネサンス式の洋風建築は、近くに寄って細部を見るたびに、その美しさを発見することが出来ます。京都府指定文化財であることは当然ですが、全国に残る明治の官庁建築の逸品として知られています。

これはどこでしょう？



○正解者の中から抽選にて二十名の方に記念品をお送りします。

○締切 平成五年十一月十五日

○正解と住所・氏名・電話番号を記入の上

〒六〇二 京都市上京区今出川通室町西入 上京区役所地域振興室「上京・史蹟と文化」宛にハガキでお送り下さい。また本誌の読後感もお書き下さい。

編集後記

▼「上京 史蹟と文化」の発行も三年目に入りました。号を重ねるにつれて区民の皆さん方にも親しまれ、各家庭に届くのが待たれているようです。上京区の特性を生かした出版物として定着させたいと思っています。

▼「思い出の西陣映画館」は今回で終わりました。「町内よもやま話」など上京区内の歴史や史蹟に関する投稿をお待ちしております。



表紙の写真

撮影者／浜岡 昇氏
場所／京都御苑内九条池

「上京 史蹟と文化」は、区内の文化や史蹟、学区の文化活動の紹介を通じて、文化とのふれあいの場づくりをはかることを目的として、上京区民ふれあい事業実行委員会と上京区役所が発行し、年二回、上京区全世帯に配布しております。

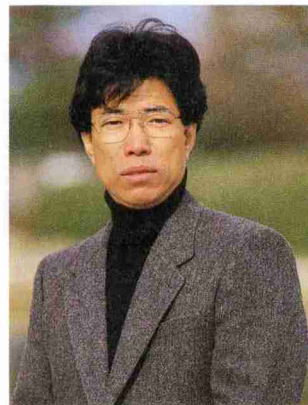
—日本の行事 五節句 世界に翔く—



元宮内庁京都事務所長 財団法人有職文化協会理事長 **石川 忠**

(五節供)

人日の節句	一月七日
上巳の節句	三月三日
端午の節句	五月五日
七夕の節句	七月七日
重陽の節句	九月九日



前京都国立博物館技官 大手前女子大学文学部教授 **切畑 健**



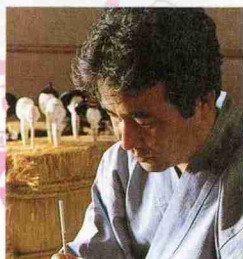
(御家紋付)

有職ひな人形



お子様の
ご成長を願う。

有職司



有職司 **山本正明**



六世 **島津豊泉**



有職司 **井上 競**

